

2026年3月22日 第二礼拝

説教題『ささげきる!』マルコによる福音書14章3～9節

主任牧師 加藤 誠

「この人はできる限りのことをした。つまり、前もってわたしの体に香油を注ぎ、埋葬の準備をしてくれた。」(マルコ福音書14章8節)

先週の月曜日、Yさんの葬儀がふじみ教会で行われました。19歳の時にクリスチャンになって以来、大井教会で42年、ふじみ教会で26年、併せて68年間、主イエスに従う歩みをまっとうされました。多くの人々から「よこせん」と慕われたYさんの葬儀には旧い大井教会の関係者も多く集われて、わたしは元氣と励ましをいただきました。ふつう葬儀は悲しいものですが、Yさんを大いに生かされた神の愛の深さと、その愛に自分が応えうる最善をささげて歩まれたYさんの熱い熱い信仰が、葬儀を通して一人ひとりの心に呼び起こされたからです。キリスト教の葬儀は、そのようにして一人ひとりの人生を生かしきる神の深い愛を覚えて、みんなで賛美歌をささげる、悲しいけれども、幸いがあふれる時であることを感じたのでした。

さてマルコ福音書の主イエスの歩みをたどっています。マルコでは11章でエルサレムに入城されて以来、主イエスがユダヤ教指導者と次々に対峙して非常に緊迫したやり取りが続きますが、その中で主イエスが励ましを受けて喜ばれている場面が二つあります。一つはエルサレム神殿で貧しいやもめがレプトン銅貨二枚をささげた場面。もう一つは今朝のベタニア村の女性がナルドの香油を主イエスの頭にささげて注いだ場面。いずれも名もない女性の行為です。かたや一番小さな貨幣を手にした女性、かたや非常に高価な香油を手にした女性。しかしお金の大小ではない。二人ともが「ささげきっている」姿に、主イエス御自身が励ましを受けて喜ばれているのです。

それに対して男の弟子たちはどうもピリッとしません。彼らなりに一生懸命に従っているのですが、どこかピン트가ずれているのです。主イエスが神の御心を求めて祈りを深め葛藤しながら歩まれているのに、弟子たちはどこか自分の栄誉を考えている。だから彼らには主イエスが神と格闘するようにささげている祈りが見えてきません。ゲッセマネの祈りは十字架の前の晩だけの祈りではなかったはず。ユダは主イエスが毎晩ゲッセマネで祈っているのを知っていたから、そこに兵士たちを連れていきました。主イエスは毎晩ゲッセマネで祈りの格闘をされていたのです。けれども弟子たちは肝心の時にいつも居眠りをし、神の前に祈りを重ねる主イエスの姿が見えていなかった。そこに弟子たちの一番の課題があったのではないのでしょうか。

エルサレム入城の直前に非常に印象的な場面があります。弟子のヤコブとヨハネが主イエスのもとに来て「あなたが栄光を受けるとき、自分たちを右と左につけてください」と願い、続けて道端の盲人バルティマイが「目が見えるようになりたいのです」

と願う場面です。どちらも願いごとです。しかし、主イエスはヤコブとヨハネの願いを「あなたたちは自分が何を願っているのか、分かっていない」と厳しく叱り、一方でバルティマイの願いを「あなたの信仰があなたを救った」と言って喜ばれました。そして目が見るようになったバルティマイは「十字架に向かう主イエスに従う者となった」ことをマルコは示します。つまり主イエスの弟子に求められているのは「自分の栄誉を求める祈り」ではなく、「十字架の主イエスが見えるようにしてください。十字架の主を見失わずに見続ける信仰を与えてください」という祈りなのです。

今朝のベタニア村の場面ですが、名もない女性の「常軌を逸した行動」に人々は驚き、「どうしてそんな無駄遣いをするのか!」と非難を浴びせています。非常に高価なナルドの香油の使い方として「常軌を逸したもの」だったからです。しかし、彼女には、神の前に格闘するように祈り歩まれる主イエスの姿が見えていたのです。主イエスがどれほど神を愛し、どれほど隣人を愛して、御自身をささげきる覚悟でエルサレムにやって来られたかが彼女には見えていた。しかし、そんな主イエスの命の使い方は「どうしてそんな無駄遣いをされるのですか!」というべきものでした。ふつうの人は、主イエスのような命の使い方をしません。善い人のためには多少の犠牲を覚悟する人がいるかもしれない。しかし悪人や罪人など、救いようのない人のために「自分の命を捨てる」なんて。そんな馬鹿なこと、だれもしようと思わないことです。まさに主イエスの生き方（死に方）こそ「常軌を逸したもの」でした。

彼女は主イエスの「常軌を逸した、神と隣人に御自分をささげきる深い愛」が見えてきた時に、心に大粒の涙を流しながら自分にできる最高で最善の応答を考えたのでしょう。そして家宝のように大切なナルドの香油の壺を割って主イエスの頭にすべて注ぎ、「あなたこそ、すべての人々の真の王、救い主です」という信仰告白をあらわしました。主イエスは彼女のその全身全霊の信仰告白を感じ取られたからこそ、「福音が宣べ伝えられるところでは、この人のしたことも記念として語り伝えられる」と言われたのです。「あなたがたは貧しい人々にはしたいときに良いことをしてやれる」とは、「他人のささげものをどうこう言うよりも、あなた自身が神の愛にどう応えるのかではないか。あなたが貧しい人に良いことをしたいと思うなら、あなたの仕方ですうしたらよい」という意味でしょう。ささげものは他人との比較ではないのです。

この女性の「ささげきる!」信仰を前にする時、私たちは自分の信仰を厳しく問われます。自分の信仰は信仰と呼びうるものなのかと。信仰は頭の中だけでは意味がない、行動にあらわしてはじめて意味がある。ただ注意したいのは金額の大小ではなく、その信仰が「十字架の主への応答」になっているか…です。「十字架の主を見つめる信仰を与えてください」と祈る中で、自分になしうる最善をもって主イエスへの感謝と愛を行動にあらわしていくことができたなら、どんなに幸いなことでしょうか。